

アリアンロッド リプレイ

ブライトナイト 1

白き騎士

沢渡 祥子

1.
 1. はじめに
 1. 【オープニングフェイズ】
 2. SCENE 1 マスターシーン（登場PCなし）
 3. SCENE 2 シーンプレイヤー：ジール・田中
 4. SCENE 3 シーンプレイヤー：シオン・シュタウク
 5. SCENE 4 シーンプレイヤー：クリス
 6. SCENE 5 シーンプレイヤー：フリーデ
 7. SCENE 6 シーンプレイヤー：レキ・ストランド
 1. 【ミドルフェイズ】
 8. SCENE 1 シーンプレイヤー：シオン・シュタウク
 9. SCENE 2 シーンプレイヤー：ジール・田中
 10. SCENE 3 シーンプレイヤー：クリス
 11. SCENE 4 シーンプレイヤー：フリーデ
 12. SCENE 4 シーンプレイヤー：なし（同行：レキ、田中）
 13. SCENE 5 シーンプレイヤー：なし（同行：シオン、クリス）
 14. SCENE 6 シーンプレイヤー：なし（同行：田中、レキ、フリーデ）
 1. ■戦闘I VSゾルダード（モブ）■
 15. SCENE 7 シーンプレイヤー：シオン・シュタウク（全員同行）
 16. SCENE 8 シーンプレイヤー：ジール・田中（フリーデ以外は全員同行）
 17. SCENE 9 シーンプレイヤー：フリーデ
 1. 【クライマックスフェイズ】
 18. SCENE 1 シーンプレイヤー：なし（全員同行）
 19. SCENE 2 シーンプレイヤー：なし（全員同行）
 1. ■戦闘II VSゲパルド・ギア装備の兵士、ゾルダード（モブ）■
 2. 加護について
 20. SCENE 3 シーンプレイヤー：なし（全員同行）
 1. ■戦闘III VS“灼熱の”アイン、ゾルダード（モブ）■
 21. SCENE 4 シーンプレイヤー：シオン（全員同行）
 1. 【エンディングフェイズ】
 22. SCENE 1 シーンプレイヤー：シオン・シュタウク
 23. SCENE 2 シーンプレイヤー：クリス
 24. SCENE 3 シーンプレイヤー：ジール・田中
 25. SCENE 4 シーンプレイヤー：レキ・ストランド
 26. SCENE 5 シーンプレイヤー：フリーデ

1. 【おまけ】

第一話 『白き騎士』

はじめに

この本は、テーブルトークRPGのリプレイです。システムは「アルシャード」。

「テーブルトークRPG」及び「リプレイ」に関する説明は、ここでは省きます。今回は6人で遊んでおり、5人がそれぞれ自分の「キャラクター」を操作し、一人が物語の進行役（ゲームマスター、GM）を担っています。

「アルシャード」は、2002年にエンターブレインから出版された日本産のTRPGシステムです。ファンタジー世界での冒険を扱っており、2005年に改訂版「アルシャードff」が出版されています。

プレイヤーは「神々の力を受け継いだ英雄」となり、「奈落」という宇宙を蝕む負の勢力との戦いを繰り広げます。

TRPGの中でも比較的演出色が強いシステムで、プレイヤーには「状況に応じた的確な判断と対抗策」よりも、「その場に合う格好いい台詞とリアクション」が求められます。

GMの進め方も展開重視なところがあり、プレイヤーが何をやってもさらわれるヒロインはさらわれるし、つかまるシーンはつかまります。作戦内容にかかわらず突入するシーンでは突入しますし、成功も失敗も話の流れ優先です。

——そんな「お約束」をある意味楽しみながら自キャラの演出に励むのが、このシステムの特徴的なところかと。

そのため、これまでのTRPGリプレイとは少々毛色が違うものになっているかと思います。ご了承ください。

今回は公式キャンペーンシナリオ「ブライト・ナイト」を使用しています。

ファンタジー世界の英雄譚ですが、剣と魔法のほかに巨大ロボットものの色あいが強く——はっきり言って、ガンダムから採用したとしか思えないネタが満載です。

では、今回のおはなしへ——。

【オープニングフェイズ】

SCENE 1 マスターシーン（登場PCなし）

GM : 計器の灯りだけが照らしているどこかの部屋で、仮面で顔を隠した帝国士官が通信機から報告を受けています。

田中 : 仮面ですか。

GM : 『ゲリラ掃討作戦で捕らえた捕虜から興味深い情報を入手しました。ジョシュア島のマークス・シュタウクの開発した新兵器を、プリムローズが購入したとのこと。帰投中のため武器弾薬は若干不足していますが、ゲパルド・ギアが4機ありますので作戦に問題はありません』

ゲパルド・ギアというのは動力甲冑のことです。……まあ、モビルスーツみたいなものかな。

シオン : いや、『動力甲冑』は『動力甲冑』で！（笑）

GM : うーん……じゃ、ボトムズ？

シオン : 『動力甲冑』！！ 変なこと言っちゃダメ！（笑）

GM : で、仮面の帝国士官は「ただちにジョシュア島に向かい強襲、新兵器を奪取します」と命令を承諾し、大型潜水艦の進路をジョシュア島に変更することになります……。

フリーデ : 仮面って一般的な仮面ですか？ それとも顔半分を覆うような……。

GM : （シナリオブックの表紙を見せて）こういう、目だけ隠すタイプの仮面です。（笑）

シオン : フェイスガードですね。

田中 : 金髪ですか？

GM : 金髪ですね。

田中 : （クリスに）金髪ですね？

クリス : いやいや、私は茶色に青い目ですよー。

SCENE 2 シーンプレイヤー：ジール・田中

◇ジール・田中エージェント1 / ニンジャ1 / スカウト1 26歳・人間・男
ゼネラル・マテリアル社（G=M社）に勤務する、しがないサラリーマンな特殊工作員。
いつかもらえる休暇を夢見つつ勤務中。特技はいつでもどこでも名刺を出せること。



- GM** : 次。……ジール・田中さん。
- 田中** : 俺！？（←席位置が真ん中だったので、最初だとは思わなかったらしい）
- GM** : 情報処理部長パトリック・ウォンから直接話があるそうで、あなたは部長のオフィスに招集されています。
- 田中** : こんにちは。「何ですか？」
- GM** : パトリック・ウォンはいつものやる気のなさそうな顔で「君か、かけたまえ」って。「君ならわかると思うけど、我が社の事業、何だか覚えてる？」
- 田中** : 「運び屋です」って言うておく。
- GM** : 「そうだよ。俺ら運び屋だよ。――今回、君がつく任務なんだが……」
- 田中** : 一応言うけど、「もう一ヶ月も休みないんですが……」
- GM** : 「君が有能だから仕事がいっぱいあるんだよ。これも俺たちの仕事だと思って諦めようよ。俺も休みないんだよ」
- シオン** : 『持病の水虫がひどいことになっちゃって……』（by『機動警察パトレイバー』の後藤警部補。パトリック・ウォンのモデルキャラ）
- GM** : さすがにそれは言わない。「最近、帝国に不穏な動きがあつてさあ。こちらとしても何もしないという手もあるんだけどさあ……。いろいろあつて今回はプリムローズに肩入れすることになっちゃってね」
- 田中** : 「具体的には何をしますか？」
- GM** : デスクからブリーフケースを出して君に渡します。「これから取り引きする相手に、これを渡してもらおうか」
- 田中** : 「わかりましたよ、渡せばいいんですね。で、場所はどこなんですか？」
- GM** : 「ジョシュア島という小さな島なんだけどさ、そこでプリムローズのメンバーと合流することになっているのよ。君なら大丈夫だと思うけど、くれぐれもうちとプリムローズの関係、バレないように。ほら、バレちゃうといろいろ問題あるからさ、ね」
- 田中** : 「わかってますよ」
- GM** : 「島に着いたらホテルに向かってくれ、そこで待ち合わせることにしているから。気楽に、バカンスだと思って。この程度の任務だったらそんなに苦労はないだろうし」
- 田中** : 「わかりましたよ、はいはい」そのままボタンと閉めて。ぼそりと「また苦労するんだろうなあ……」（笑）
- GM** : 秘書から「ジョシュア島に向かうホワイトスネイクというキャラバン船に乗ってもらいます。これがチケットです」と渡されます。
- 田中** : 「ああ……はいはい」
- GM** : ジールにはクエストで『品物を運ぶ』。しっかりとプリムローズのメンバーに合流して

品物を渡すと。

SCENE 3 シーンプレイヤー：シオン・シュタウク

◇シオン・シュタウク（パンツァーリッター1 / ファイター2） 15歳・人間・男
本キャンペーンの主人公で島に住む少年。開始時点ではまだクエスターになっていない。
息子への関心の薄い発明家の父親と、修理したヴァルキリーと住んでいる。母親はいない。
王道な、富野系主人公のロールプレイを目指す予定。



- GM** : 次。――主人公。
- シオン** : もう？（ちなみに彼の席次はマスターの左隣、田中の2つ右）
- フリーデ** : ずいぶんと変則的ですね。（オープニングシーンの順番は、基本的に時計回りです）
- GM** : そう書いてあるんだもーん。君のいる場所は知っての通りジョシュア島。ウェストリ廃王国沿いの海に浮かぶ小さな島です。なんと今日は半年に一度の祭りの日！
- シオン** : 早速このガラク……じゃなくて発明品を売っておこづかいにしよう！
- クリス** : 型抜きー、型抜きー、うまく抜けたら100円だよー。
- GM** : メインストリートには露天が並び、多くの人がこの島に訪れて賑わっています。君はよくつるむ友人達と一緒に露天に繰り出しているかな。
- シオン** : 焼きイカ焼きイカ、焼きソバ焼きソバ～。
- フリーデ** : ずいぶん和風だな！ ポツポ焼きとかあるのかな。
- GM** : 友人サムが君を引っ張って、「今度はこっちの方に行こうぜ～！」
- シオン** : 「えー、でもまだアレ終わってないし」
- GM** : 「そーんなこと気にするなよー」こいつはトシも若いのに酒も入ってハイになっているようです。「祭りの日だろ、けちけちするなよ～。そろそろ例のホワイトスネイクっていう船も来るしよ」
- シオン** : 「ああ、今回は何を運んでくるんだろうな」
- GM** : 「さあな。きっといいものいっぱい来るんだぜ～」
- シオン** : 「なんだサム、すごい嬉しそうだな。まさか例のモノが!？」
- GM** : 「……ふっ」
- 田中** : な、何が？（笑）
- GM** : そんなことを言っていると港の方から汽笛が聞こえます。どうやら船が到着したようです。「行こうぜ、当然例のモノも一緒に、コソっとな」
- シオン** : コソっとか！（←なぜかものすごく嬉しそう……）

SCENE 4 シーンプレイヤー：クリス

◇クリスオラクル1／ホワイトメイジ1／ブラックマジシャン1 16歳・人間・女
本キャンペーンのヒロイン。出自ライフパスはもちろん「神の恩寵（特徴：美人）」。
記憶を失っている巫女で、シャードの意思を形で受け取れる特殊な才能の持ち主。
ロールの目標はクラリス風。目指すは宮崎系ヒロインの爽やかさ。



- GM** : 君はジョシュア島行きの船、ホワイトスネイクに運良く便乗できました。この島にマーカス・シュタウクという人物がおり、彼に会いなさいという啓示がありました。もうすぐ着きますが、島に近づくにつれてどうも嫌な予感がするようです。
- クリス** : 「（ヒロインっぽく）何だろう。胸がドキドキする……（by『風の谷のナウシカ』）」
- GM** : そうこうしていると汽笛が鳴り、島に到着したようです。
- クリス** : 「ここがジョシュア島……」と言いながら降りていきます。
- GM** : イカりのイレズミを入れた船員が「姉ちゃん、今日はこの島に用かい？」って声をかけてきます。「今日は半年に一度の祭りだからなあ」
- クリス** : 「まあ、お祭りなのですか？」
- GM** : 「おや？ 姉ちゃん、祭りのために来たんじゃないかねえのか？」
- クリス** : 「ええ、私は……」って、オラクルっていうのは明かしていいものなの？
- GM** : 明かすと帝国に追われちゃいますよ。
- クリス** : 「……ちょっと知人に会いに来たんです」
- GM** : 「へえ、こんな辺鄙なところにねえ。まあ、祭りもあるから楽しんできな」
- クリス** : 「はい、ありがとうございます」
- GM** : 「おう」とか言って別れます。
- クリス** : 「さて、マーカス・シュタウクさんのおうちは……」と、そこらの露天を見て「まあ、素敵」ときよろきよろしながら……。
- GM** : 「姉ちゃんどうだい、このリンゴ？」
- フリーデ** : ……なにげにガラの悪い奴が多いところですね。（笑）
- GM** : 漁港なので、どちらかという気のおっちゃん連中が多い。
- シオン** : どう考えてもテキ屋しかいないのはどうよ。
- GM** : それは俺の芸風だと思っかねえ。（笑）
- クリス** : じゃ、いつの間にか手にリンゴ飴を持ちながら地元の店っぽいところに行きます。
- シオン** : リンゴ飴もあるんかい！
- クリス** : 「ちょっとお伺いしたいのですが、この島にマーカス・シュタウクさんという方がいらっしゃると思うんですが……」
- GM** : すぐピンときたのか「ああ、マーカスさんといったらあのマーカスさんしかいないわ」
- クリス** : 「恐れ入りますが、場所を教えてくださいませんか？」
- GM** : 「この島のずっと外れにあるガラクタ置き場に住んでいるよ」
- クリス** : 「さようございますか、ありがとうございます。どうぞ、召し上がってください」とリンゴ飴を渡して去っていきます。

GM : 「他のことは聞かなくてよかったのかしら……」とか言うのがかすかに。

クリス : 何が重要な情報でもあったのだろうか？

GM : とにかくそんな感じですよ。あなたにはクエスト『マーカスに会う』を。

SCENE 5 シーンプレイヤー：フリーデ

◇フリーデ ヴァルキリー1 /ハンター1 /ホワイトメイジ1 ヴァルキリー・女性型・製造年不明

主人公と主人公の父親によってガラクタの山の中から見いだされ、修理された。修理される前のことは一切覚えていない。



GM : 君は町から離れた小高い丘に立っています。いつもやっているのかどうかはわかりませんが、一人何かに思いを寄せ、海を眺めています。

フリーデ : 実は何も考えてないだけ。

GM : それでもいいです。

シオン : その時意味深な言葉を言うと、後で伏線になるんです。

フリーデ : じゃ、「今日の風はいつもと違う……」とでも。

GM : 海を眺めていると、突然白波が立ちます。そして、巨大な黒い塊が海をたたき割るように出てきます。エイの形に似た大型潜水艦のようなものです。そこからカタパルトが開いてロボットのような形をしたものが3機、圧縮空気の発射音と共に射出されます。

フリーデ : はあ!?

シオン : 人型のゲパルド・ギアですね。

GM : 方向はジョシュアの町の方です。どう見ても武装しています。

フリーデ : わたしが今いる場所と、町と、わたしの住んでいる場所はどういう位置関係なんですか？

GM : あなたがいる場所の向こうに町、潜水艦、その更に向こうに自分の家があると思ってください。

フリーデ : ああ、遠いんだ。

GM : その3機が出た後、更に――これ、説明するのすんごく嫌なんですけど――。

田中 : 赤い……？

GM : そう。赤いロボットのようなものが発進準備をしています。今準備しているのは特注らしい。今まで人型のメカ的なものはいろいろな戦闘も行われていますが、こういうのは聞いたことがありません。

シオン : ……ツノは？

GM : ……あります。(笑)

田中 : 嘘だ、嘘だよー！ 嘘だと言ってくれー！(笑)

GM : (重々しく)信じられないだろう。だが、事実だ。

フリーデ : 今から町全体をどうこうできるとは思えないけど町の中にはシオン様がいらっしゃるはずなので、彼の安全だけは確保しなければ。飛んでいきます。(ヴァルキリー専用装備『エンジェルウイング』を装備している)

GM : ではあなたにクエスト、『主人を守る』。この場合マーカスもそうですけれど、主人公

であるシオンも『主人』のうちに含まれます。

SCENE 6 シーンプレイヤー：レキ・ストランド

◇レキ・ストランドサムライ2／ファイター1 33歳・人間・男

ウェストリ王国の元騎士で、10年前から行方不明の王女の行方を追っている。

現在は反乱組織プリムローズに身を置き活動中。帝国の“灼熱の”アインを仇と狙っている。



GM : あなたはプリムローズのリーダーであるハンス・ウィルマーから、直々の極秘任務を受けています。そのためにもうジョシュア島に来ており、今は島内の1件しかないホテルのロビーにいます。

レキ : ホテルに滞在しているんですね。

GM : 君の任務は物を受け取るための護衛。それは新しいパンツァーリッターが乗る新兵器で、そのためにアーダルベルトというパンツァーリッターが一緒に来ています。代金はスポンサーであるG=M社が持ってくるので、今はG=M社のエージェントが来るのを待っています。代金を受け取ってから兵器を開発した人物のところと一緒にいくことになっています。

レキ : ほうほう。

GM : ホテルのロビーに腰を据えたアーダルベルトが、落ち着いた声で「これで帝国に対してちっとは楽になるかなあ、レキよ」

レキ : 「そんなにすごい兵器なのかい？」

GM : 「ハンスさん直々の任務なのだから、よほどのものだろう」ちなみに、ハンス・ウィルマーはカリスマ的な指導者です、覚えておいてください。

シオン : 覚えておくと試験に出やすい。

GM : そんなことをしていると、G=M社のエージェントと接触する時間が近くなってきました。

レキ : 「そろそろ時間じゃないか？」

GM : 「そうだな、さっき汽笛も聞こえたな。俺、ちょっと見てくるわ」と、アーダルベルトが立ち上がります。「俺がいない間に来るかもしれないから、お前はここにいてくれよ」

レキ : 「わかった。気をつけて」

GM : アーダルベルトがロビーを出ようと玄関先に立った時、ホテルの一角が爆音と共に崩壊します。

レキ : どかーん。

GM : 当然、その下にいたアーダルベルトはガレキの下敷きになってしまいます。

田中 : 早っ。(笑)

レキ : 呆然とするしかないですね。近寄れるものだったら近寄ります。「大丈夫か!？」

GM : 声はなく、ガレキの下からつーっと血が一筋伝ってきます。破壊された壁の向こう側から人型のメカが姿を現します。ゲパルド・ギアと呼ばれていますな。

レキ : 「動力甲冑!？」

シオン : こんなところに帝国の新兵器だと!？

GM : こんな辺境の地に動力甲冑と呼ばれるものがあること自体おかしいですね。ここでシー

ンを切らしていただきますが、クエスト『新兵器を持ち帰る』
田中 : 君がもしかするとブライト・ノアの仕事かもしれない。(笑)

【ミドルフェイズ】

SCENE 1 シーンプレイヤー：シオン・シュタウク

- GM** : 君とサムがホワイトスネイクに向かっている途中、町中で君の目の前に人型の兵器が降下してきます。
- フリーデ** : それって、大きさはどのくらいなんですか？
- GM** : データとしては人が2人ぶんぐらいかな。実際はそんな高くないんですけどね。
- フリーデ** : レイバーぐらいかな？ (by『機動警察パトレイバー』、ちなみにイングラムの体高は8m)
- シオン** : レイバーよりちょっと小さいかな。4mくらい。
- GM** : 目の前に降下したメカは、射撃武器で周囲の建物を破壊し始めます。
- シオン** : 頭抱えて、「サム、サム！ 逃げるぞー！！」
- GM** : サムはもうとっくの昔に消えています。(笑)
- シオン** : うわお。
- フリーデ** : そして近くの崩れた建物から、血が一筋つーっと。(笑)
- 田中** : 早すぎます、サムはいいところで死ぬので。
- シオン** : 俺、その動力甲冑の後ろ抜けるように走ろうと努力します。
- GM** : 後方から更に帝国兵がぞろぞろと。君みたいなガキは無視しています。
- シオン** : はじっこで頭抱えて様子見しています。
- GM** : 人は殺していませんが、威嚇して民衆に恐怖を与えているんでしょう。帝国兵達は一般人に対して尋問みたいな形でまくし上げます。店の人達は逃げています。
- シオン** : ここでヒーローっぽくしてみようかな。「(熱血っぽく)な、何すんだよ！」
- GM** : 「うるせえ！」隊長みたいな人が、「おら、あんま民間人に手を出すな。無闇に殺したら後で俺らが大変なことになるじゃねえか。さっさとマーカスの居場所を吐かせるんだ！」
- シオン** : それを憎々しげに見つめて、裏道から家に帰ります。
- GM** : 逃げられるかどうか判定してもらおうかな。
- シオン** : すいません、私には能力値がないんですが？
- GM** : 大丈夫です。クエスターとしての能力はないですが、能力値はあります。
- シオン** : あ、そうなのか。まだ俺モブかと思っていた。
- GM** : モブ以上、クエスター以下。加護と特技が使えないくらい。当然ブレイクも使えません。(笑)
- 田中** : 殺すなら今だ！
- シオン** : 【反射】で(ころころ)13とってます。
- GM** : 余裕で逃げられます。帝国兵はあなたのことは目もくれていないようで、島の情報を知っている老人や大人を尋問しているようですね。
- シオン** : じゃ、走りながら「フリーデと父さんが！」
- GM** :という形で行くんですね。あなたは親父のところに向かうということでシーンを切らせてもらいます。
- シオン** : 一応、フリーデのことを先に言っておかないと。父さんなんて希薄だし。

SCENE 2 シーンプレイヤー：ジール・田中

- GM** : 皆さん、登場する時は難易度10で判定してください。ちなみにレキはもう登場している
いいです。
- レキ** : あ、もう合流しちゃっていいんですか。
- GM** : ジールは炎に包まれた町の中でホテルを探していましたが、ホテルから逃げてきた人間
がデータにある取引相手の顔と一致します。
- 田中** : 「この町はかなり物騒なようだね」と言いながら、「あんたが取引相手か？ GMの
者だが。私田中と申します（と、名刺を出す）」（笑）
- フリーデ** : この状況下でもやっぱりそれはやるんですね。
- シオン** : アタッシュケースをこうやって掲げると、時々キン、カンと音がするんだ。（笑）
- レキ** : 「少々遅かったようだ。町の状況は見たでしょう」
- GM** : レキはG=M社のエージェントと接触したら、エージェントと共に新兵器を取り引き
にマーカス・シュタウクのところまで行くようにいられています。
- 田中** : 「トレードは最後まで見届けなければならないので、当然ついていきますよ。さて、
その取引場所とやらに向かいましょうか」
- レキ** : 場所は知っているんですか？
- GM** : どこに行けばいいのかは依頼書に入っていました。
- レキ** : 「状況が状況なので、急いだ方がいいかもしれない」
- GM** : 活動している帝国兵が目立ってきます。このままだとひよっとしたら戦闘になりかね
ない。
- 田中** : 「ここの場所は知らないのについていきますよ」と言っておこう。

SCENE 3 シーンプレイヤー：クリス

クリス : たったーと歩いていきます。

GM : 後ろの方から戦火の音やら光やら。

クリス : 「(ヒロインっぽく)何かしら?」と言って振り向くと「あれは.....!」って。

GM : 侵攻の度合いは激しいらしく、すぐあなたがいる辺りまで戦火に巻き込まれます。

クリス : 「大変!」と言いながらマークスさんちを目指して、ゆっくり歩いていたのが走り始めます。たたたたた。

GM : 帝国の指揮官にあたる人物の姿が見えます。仮面はかぶっていますが、まだ動力甲冑には乗っていません。

クリス : 姿が見えるんですね。

シオン : 通常の3倍が。

フリーデ : キャスバル兄さーん。

GM : 記憶喪失のあなたでも直感的にわかってしまいます。仮面で隠した素顔の部分は見えませんが.....兄ではないかと。(爆笑)

クリス : アルテイシアかい!

田中 : そこまでなぞるか!? 表紙の女の子、それで金髪なんだ?(笑)

クリス : 金髪に変更しまーす。(と、キャラシートを書き直す)

GM : だから言ったじゃねーかよ、通常の3倍なんだよ、このシナリオ!

クリス : ここはヒロインらしくトラブルにつっこんでいきます。「兄さん、私よ! どうしたの兄さん!」

GM : 仮面の指揮官はあなたの方を向いて.....動揺しますね。近くにいる兵士達が「どうなされたのですか、アイン殿」

クリス : それは爆風であまり聞こえないんだろうなー。

田中 : いや、聞こえるんですよ、このゲームは。(笑)

GM : 聞こえます。瞬時に冷静な感情を取り戻したらしく、的確に指揮しています。あなたのことは意識的に無視する態度を取るようです。

クリス : 「兄さん! 兄さん!」とヒロインっぽくしつこく呼びかけます。可憐にもの悲しげに。

GM : 兵士が「民間人が変な事を言っていますが」と言うと「構わん、威嚇しろ」と指示します。「いいのですか?」というのに対して「構わん」というので、兵士は威嚇します。

シオン : マスター、登場しまーす!

田中 : おいしいところに登場だー。

シオン : だっておいしいところには登場しないとまずいだろうし。

田中 : 難易度10で判定お願いします。

フリーデ : ボーイ・ミーツ・ガール。

シオン : (ころころ) 余裕で出ます。威嚇しようとしたところに女の子を抱きかかえて転がります。

GM : 明後日の方向に射っているんで非常にマヌケな格好に見えますが、あなたは抱きかかえることに成功します。

シオン : 「女の子に向かって何やっているんだあんたら! 大人だろ!」と。

田中 : おおっ。ガンダムだ、ガンダムだぞー。

GM : 意に介さないようで「島の少年よ、こんなところでいきがったところで何もできないぞ」と言う。すぐ近くの兵士に向かって「島民に多少の犠牲が出て構わん、早くマークス・シュタックを見つけだせ」

クリス : 「兄さん、どうして.....」と言いながら宮崎泣きで泣いています。

フリーデ：宮崎と富野の融合.....。

田中：2人ともいつまで続くのか見物だよね。（笑）

GM：クリスの泣き崩れている姿を見て辛くなったのか、背を向けて「私は帝国軍人少佐、“灼熱の”アインだ。それ以上でもそれ以下でもない」

シオン：「“灼熱の”アイン!？」

クリス：.....（冷めた口調で）『灼熱』ってさ、自分で言っててはずかしくないか？

シオン：ダメ。ダメ！

クリス：あ、これはプレイヤー発言だから。

GM：この世界、こんな奴ばっかですわ。

田中：帝国兵達は「こんな奴、少佐とは関係ないだろう。変な噂を立てるなよ」と、威嚇して追い払う。

クリス：「きゃー」と言いながら。

シオン：「いい加減にしろよあんた！ さっさとどっかいきな！」

GM：そうすると、チンピラ風の帝国兵が「はア？ 何イキがってるんだ坊主。そんなこと言っただけは何一つできねえんだ。ほら、この銃に向かって何かできるか？」

シオン：それは.....。唇噛んで下向きさ。

GM：「ガキは黙って家でネンネしてな！」

シオン：そこで思い出して「.....走れる？」と女の子に。

クリス：無言で目を見つめてうなずきます。

田中：お、ちょっと宮崎ふうになりましたね。

シオン：「じゃ、こっち！」と引っ張っていきます。

GM：その時、アインの元に一人の帝国兵がやってきます。「シュタウクの場所がわかりました!」「わかった」という声が聞こえますね。

クリス：「.....シュタウクさん？」と反応します。

シオン：「急ぐよ」

クリス：「あ、はい」

GM：「念のため、私のゲパルド・ギアも出せ!」という声が聞こえながらフェイド・アウトしていきます。ここでシーンを切らせていただきます。

クリス・シオン：.....（脱力）。

シオン：ちゃんと富野と宮崎をクリア。すっげー大変なんだけど.....。（笑）

クリス：これ結構厳しい。思ったよりしばらく大変だね。

フリーデ：何回かやっていけばきっと快感になっていくよ。

シオン：早めにスイッチ変えないとねー。

SCENE 4 シーンプレイヤー：フリーデ

GM : あなたが向かう頃にはかなり町の戦火も広がっており……。

フリーデ : 町中見回してぎっくりと歩き回りながら、知っている人がいるたびに「シオン様は見かけませんでしたか？」と。

GM : 島民達はそれどころじゃないらしい。「て、帝国兵が来た……！ 俺らも終わりだ！」

フリーデ : それには頓着しません。

GM : そうすると、全速力で走り抜けていくサム君がいます。(笑)

フリーデ : すれ違いしなに首根っこひつつかんで、「シオン様と一緒に行かれましたね？ シオン様は今どちらですか？」

GM : 「シ、シ、シオン……？ シオンは、シオンは、うわあああああ！」と、その場で泣き崩れます。「シオンは帝国兵の巨大なロボットの前で……！」

フリーデ : 「そうですか」……ぽいっ。(笑)

田中 : 残酷だー。

フリーデ : 彼が来た方向に行きます。

GM : その方向に帝国兵達は特にいないのですが、店を持っている人とかが呆然としています。

フリーデ : 大きなロボットについてと、シオン様を見かけたかどうかを聞きます。「見かけませんでしたか」

GM : 「大きなロボットはあっちの方に行ったよ」

フリーデ : 「シオン様は？」

GM : 「あんたのところのあの子かい。彼は自分の家に急いで戻ったようだよ。あんたも急ぎな。どうやら帝国兵はマーカスさんを追ってきたみたいだよ」

フリーデ : 「教えていただきましてありがとうございます」——じゃ、飛んで家に帰ります。

SCENE 4 シーンプレイヤー：なし（同行：レキ、田中）

- GM** : レキとジール。
- レキ** : 向かってまーす。
- 田中** : 向かってまーす。たたたたた。
- レキ** : 「ジールさん、済まないね。大変なことになっているねー」
- 田中** : 「仕事ですから」
- レキ** : 「お互い苦勞するね」
- GM** : 帝国兵達の目的はあなた方と一緒にのようだ。すぐ近くに来ているわけではないけど、向かっている気配はする。
- レキ** : 「場所はどうかやらバレたようだ。とにかく急ぐしかない」
- 田中** : 「例のもの」——本当は本人はわかっていなきゃならないんだけど——「を確保するのが先決なんだろう」
- レキ** : 「品物が無いことにはどうにもならないしな。奴らに渡すわけにもいかん」
- シオン** : そこで2人はふと思った。パンツァーリッターいないじゃん。動かせるのか？（笑）
- レキ** : とりあえず行ってみてからね。
- GM** : そうすると、目の前にどう見ても茶色いガラクタのようなものが。
- シオン** : 何言っているんですか。元はペンキを塗った黄色や青のものも見えるんですよ。
- GM** : でも雨とか潮風でいい感じに赤茶けてますね。建物はまだ見えません。ガラクタが先に見えて、それが丘のような状況になっている。
- シオン** : シオンが体鍛えられた理由がわかったよ。
- GM** : （シオンに）っていうか素直に登場しろよ。登場判定していいんだからよ。
- シオン** : え？ もうちよっとおやじーずの活躍を見ようかな、と。
- フリーデ** : じゃ、わたしそろそろ出ます。（ころころ）ええと、10ぴったし。
- GM** : 問題なく出れます。
- フリーデ** : 上空からひゅーっと降りてきて、「ここから先は私有地になりますのでお引き取り下さい。このような状況ですので、お客様はお迎えしておりません」と、臨戦態勢で。
- 田中** : 名刺を出して「私こういう者で、取引に来たんですが……」（笑）
- フリーデ** : わたしはその話を聞いていますか？
- GM** : マーカスが研究室にいる時に「ここ数日中にG=M社のサラリーマンと革命運動家の連中が来るから、その時は道案内してやってくれ」と。
- フリーデ** : では、「お話は伺っております」と名刺を両手で受け取って。
- レキ** : 「我々は急いでいるんだ。マーカスさんに早いところお会いしたい」
- フリーデ** : 「すぐにご案内いたします。こちらです」と先に立って最短ルートで行きます。スピードを上げつつ、ついてこれるかなーって。
- 田中** : 私ついていきますよ。しゅしゅしゅしゅしゅって。（笑）
- レキ** : がしゃがしゃいいながら。
- フリーデ** : へえ、ついてこれるのか、って思いながら少しずつスピードアップ。（笑）
- クリス** : いじめだー、いじめだー。
- フリーデ** : いいえ、一刻も早くお客様をお連れするためですよ。

SCENE 5 シーンプレイヤー：なし（同行：シオン、クリス）

- GM** : ヒーロー・ヒロイン側のシーンです。
- シオン** : 彼女を引っ張って自分の家に走っています。「さっきシュタウクって言っていたけれど、その人に用事が？」
- クリス** : 「私、マーカス・シュタウクさんという方に会いに来たのです」
- シオン** : 「どんな用事が？」
- クリス** : (きっぱり)「わかりません」(笑)
- シオン** : 「わ、わからない？」
- クリス** : 「わからないけれど……けれど私は彼に会う必要があるのです」
- シオン** : ……。(←何か言いかけて自制したっぽい)
- クリス** : 「お願いします！」(←力押しでこのシーンを乗り切るつもりらしい)
- シオン** : 「わ、わかった。あんたを信じるよ」
- GM** : 君たちは走っているけれど帝国兵は走っているわけじゃないんで、軍用車みたいなので先に越していきます。
- シオン** : 「ここからは行けない。裏、回るよ！」
- クリス** : 「はいっ」
- シオン** : 「あ、紹介が遅れたけれど僕の名前はシオン・シュタウク。あんたが会おうとしているマーカスの息子だ」
- クリス** : 「そうだったんですか？ まあ、自己紹介が遅れまして。私、クリスっていいいます」
- シオン** : 「とりあえずクリス、こっちに行くよ」(←過度なまでにヒーローらしく)
- クリス** : 「はいっ」(←過度なまでにヒロインらしく)
- 田中** : ——今のとこセーフ！
- GM** : ごめんな、そんなことぶち壊すキャラがまた登場するんだ。後ろからサムが「無事だったかー！」と半泣きになりながら突進してきます。
- シオン** : 急いで手を離して「サム！」と。ちょっとテレる。(笑)
- GM** : 「シオン～！」ときらきらしながら泣きつこうとします。
- シオン** : 「サム～(ひらっとよける)」
- GM** : 「何するんだよ！」涙の跡が泥まみれ。
- シオン** : 「約束しただろう？ とりあえず熱い包容はやめようよ」
- クリス** : 横から「あの、この方は……？」と。
- シオン** : 「ああ、仲間のサムっていうんだ」
- クリス** : 「サムさんっておっしゃるのですか。私クリスです。よろしくをお願いします」
- GM** : どっきーん！「なんだよ、あの女の子。すげえ可愛いじゃねーか！ シオン、お前、知り合いか？」(笑)
- 田中** : いいなあそれ。
- クリス** : ほほほほほほほ。(笑)
- シオン** : 「親父に用があってきた客らしいぞ」
- GM** : 「客？ あんなガラクタの場所にか？ 嘘だ！ そんなところにあんなべっぴんさんが来るなんておかしいじゃねーかよ」
- シオン** : 「そりやおかしな道具の集まりなんだから、おかしな女の子が来たっておかしくないだろう」
- GM** : 「お前、何か嘘をついているな……？」
- シオン** : どき。
- 田中** : 『どき』なんだ？
- GM** : 「畜生、お前は俺にとって親友だと思っていたよ。今の今まではな！」
- シオン** : 「さっき動力甲冑の目の前で置いていかれるまでは親友だと思っていたよ」(笑)

GM : 「それはそれ、これはこれ！おおっといけねえ、お前の親父さん狙われているみたいだぜ」

シオン : 「お前が止めなきゃもうとっくに行ってた」

GM : 「それはそれ、これはこれ！さあみんな行くぞ！」

シオン : 「サム、正面から行くなよ、ついてこい。——行くよ」彼女の手を持って走っていきます。

クリス : はーい。

GM : 「お前、ズルイぞー！」

田中 :いやあサム面白いなあ。サム、ずっと出てきて欲しいなあ。

クリス : いい味出してきてるねー。

シオン : 未だにこのシナリオのクエストもらってないぞ。

GM : ごめんね、君のはまだ書かれていないの。パンピーだし。クエストもらっても意味ないし。一緒に近道で行くという形で、シーンを終わらせていただきます。

SCENE 6 シーンプレイヤー：なし（同行：田中、レキ、フリーデ）

GM : じゃ、お三方。

フリーデ : 多少無理なところでも構わずに「こちらです」ってどんどん先導していく。

シオン : そこ3歩進んだら踏まないでください。トラップが。

GM : 後ろの方で「うわーっ」とか「ぐわーっ」とか「何だこりゃああ」とかいう声が聞こえます。

レキ :本当にトラップか。（笑）

フリーデ : 「振り返る必要はありません、予定内の出来事です」

GM : 入り口とまではいかないけれど、開けたところまでは出ます。——（シオンとクリスに）あなた方も出てもいいですよ、裏道通っていたわけだから。

田中 : 別に出なくてもいいですよ。

GM : これ以上このシーンで時差を増やすのはどうも.....。（笑）

田中 : まあまあまあ。で、出たらどんな感じなんですか？

GM : 研究所というかボロ屋ですけど、地盤はそれなりにしっかりしているようです。

レキ : 辺りを見回します。

フリーデ : わたしはまっすぐ家に入ろうとします。

GM : では、入ろうとドアノブに手をかけようとする、あなたが来た方向とは別のところから強引に装甲車らしいものが突っ込んできます。

田中 : 「やばいな、早く会わせてくれ」と言おう。

GM : ガタガタと帝国兵達が出てきて、（田中に）「お前がマーカス・シュタウクカー！？」と。（笑）

田中 : そんなわけないだろうー！

GM : 「みんなそう言うんだ、さっさと抵抗をやめて捕まりやがれ！さあ、ブツを出すんだ！」と、相当テンパっています。

レキ : 何人いるんですか？

GM : 後ろからどんどん来て、1グループ3人が3グループ。

フリーデ : ——それは多いの？ 少ないの？

田中 : 少ないですね。10人がひとまとめみたいなものだから。

シオン : 経験値にもならねえや。

GM : じゃ、1グループ20人ぐらいにしておきましょうか。あなた方の小手調べも兼ねて。

シオン : へー、1グループ20人かあ。.....ってアホ！それはアホ！

GM : じゃ、普通に10人3グループで。

フリーデ : では、「招かれざるお客様はお引き取り下さい」と。

GM : 「招かれねえ招かれるなんて関係ねえんだ！早くマーカス・シュタウクを出せ！」一番最初に来たバカ帝国兵のグループは、真っ先に田中さんの捕獲にかかります。

田中 : 何ーっ！？

GM : その他の冷静な帝国兵はあとの人にかかります。

田中 : 一番最初に、セットアップで何かすることがあれば。

GM : 登場判定をするのはセットアッププロセスです。登場する気があるのならここでダイスを振ってください。難易度は10です。

クリス : （ころころ）失敗ー。

シオン : （ころころ）出た。女の子に「ちょっと隠れていて！」って言って俺だけ出る。

GM : サムは隠れています。シオンは登場したんですね？ 家の玄関口には帝国兵とフリーデと、全く知らない2人組がいます。帝国兵の一人が2組みの片方に向かって「観念しろ！」って武器を向けています。

シオン : 走って行って、（レキに）「父さん、早く逃げなきゃ！」

レキ : え。

GM : 「何いっ!? 騙されたぜ、こっちの奴だと思ったんだが、まさかこんな戦士風な奴が研究者だとはな」(笑)

フリーデ : 「え、ええと.....シオン、様？」

GM : 「ほら見たことか、ここにいるじゃねーか！」ともめています、 「誰でもいい、わかったんだ、さっさと掴まえろ！」と。

田中 : とりあえず戦いましょうぜー。

■戦闘I VSゾルダード(モブ)■

[行動順] 行動値9ジール・田中

行動値7フリーデ

行動値6レキ

行動値なしモブのゾルダード(10人×3グループ)

※シオンはまだ能力に目覚めていない一般人なので、この戦闘では員数外です。

田中 : じゃ、爆弾をピーン。《忍法：火遁の術》(ニンジャ1Lv特技。〈炎〉2d6の魔法ダメージ)でござる!【魔導値】で攻撃します。(ころころ)14ですね。

GM : (ころころ)ええと、同率の場合はどうなるんでしょう？

田中 : 受動側有利じゃなかったっけ? 避けられたことになるのかな。あらら。

GM : ひょいっと避けて「おおっと危ねえ！」と。

フリーデ : では、グループのうちのひとつに攻撃。「望まれざる来客は排除します」(ころころ)あ、低いな。14。

GM : (ころころ)くりました。

フリーデ : ええと、ダメージは基本の数字に1d6を足すんですよね?(ころころ)〈斬〉11点。

GM : あなたの剣風に巻き込まれて、10人が一気に壁に叩きつけられて絶命します。

フリーデ : そんなことは当たり前のように、別な連中に向き直ります。

GM : 「なんだコイツ!？」

シオン : 「見たか、うちのお手伝いさんの力を！」(笑)

田中 : 結局まほろさんなんじゃん!(by『まほろまでいく』)

レキ : テンパっている奴のいるグループに仕掛けまーす。(ころころ)13です。

シオン : 「父さん頑張ってー！」

GM : 「本当に奴は科学者かー!？」(ころころ)1ゾロじゃどうにもなりません。

レキ : (ころころ)12といって斬ります。

GM : 次々と彼の刀の錆にされていきますね。最後の奴が「そんなバカな.....!ただの科学者に俺らが!」と言って絶命します。

シオン : 「見たか、父さんはこの島の剣豪なんだぞー！」(笑)

レキ : 「だから何なんだ、お前は!？」(笑)

GM : こちらの行動、一番危険分子であるフリーデに。モブであるパンピー(=シオン)は無視します。フリーデに「野郎、死ね!」といわんばかりに攻撃。(ころころ)低い...
...14。

フリーデ : 回避低いんだけどなあ.....。(ころころ)8。

GM : え、8!?(ころころ)ダメージが11の〈斬〉。

フリーデ : 7点入る。「一部損傷しましたが、行動に影響はありません」

シオン : 「フリーデに何するんだ!」

フリーデ : 「シオン様、少しお静かに」(笑)

シオン : うわーん。

田中 : 冷静に言われてしまいました。役に立たねえなー、本当に。

シオン : だってすることないんだもん。
GM : またセットアップフェイズ。クリスさん、出る気があるならここで行動判定をしてもよろしいです。
クリス : 出ます。おりゃっ(ころころ)出た。
田中 : あ、俺の方が先だから、マイナーアクションで《忍者刀》(ニンジャ1Lv特技によって得られる装備品)をじゃーん。斬りまーす。(ころころ)11。
GM : ダメージください。
田中 : 低いっすよ。(ころころ)〈斬〉の7点。
シオン : 7人斬られました。
GM : いや、残念ながらもっと残っています。
田中 : ああ、アーマーがあるからか。
GM : 今ので4人斬られました。まだ6人います。
クリス : フリーデが攻撃されているのを見て、「危ない！」と言って回復かまします。いきまーす。えいっ。(ころころ)9点回復しました。
フリーデ : あふれたよ～。
田中 : すごい力だ！これが巫女のパワーか。
フリーデ : 今はそれには構わず。攻撃で残り6人に、(ころころ)命中が14。
GM : (ころころ)ください。
フリーデ : (ころころ)斬りの13点。
GM : オーバーキルですね。断末魔の声も聞こえないくらい瞬殺。
田中 : ヴァルキリー強いぜ～！
フリーデ : でも能力は低い方なんですよ、他の人と比べると。
クリス : そこでもいいでしょうか？ それを見て、貧血を起こします。
シオン : おっけー、抱きかかえるよ！「大丈夫、クリス？」(努めてヒーローぼく)
クリス : おっけー！「すみません、ちょっとびっくりしちゃって」(努めてヒロインぼく)
シオン : 「そうだよね、こんなの見たら普通倒れちゃうよね」
クリス :棒読みだ。(笑)

そんなこんなで、無事に戦闘終了。

GM : フリーデ、シオンが若い女の子を抱きかかえている。
フリーデ : 「シオン様.....。お祭りだからといってそのように羽目はずすのはいかがなものでしょうか」(笑)
シオン : 「こんな非常事態にお祭りの一言で片をつけないでくれ。父さんへのお客様だ」
GM : そうすると、今までどこに隠れていたのかサムが出てくる。「そうだよ、あんたらの客人なんだよ、な」と肩をばんばん抱きます。
クリス : 私はレキの方に向かって「マーカス・シュタウクさんでいらっしやいますね？」(笑)
レキ : 「いや、だから.....」
シオン : 「クリス、さっきのは父さんが無事に逃げられるように、何となく父さんと言っただけだから」
フリーデ : 「とりあえず中に入りましょう」と促します。
GM : 「そうだな、まだ向こう側でアレだし」
フリーデ : 「あなたもいらっしやるのですか？」
GM : 「俺もこんなところで一人.....」
シオン : 「とりあえずサム、帰った方がいいよ」
GM : 「そうか？ じゃ、俺、お前が来た道で帰るから、無事だったらまたな」

シオン : 「おう。コソっとした奴よろしくな〜」

GM : 「じゃあな〜」といなくなります。当然ながら、まだ迷路に迷っている連中は「ぎゃあ〜、なんでこんなところに毒蛇が〜！」（笑）

クリス : 蛇！？

フリーデ : 「正直、あそこまで成長するとは思いませんでした。言い忘れておりましたがシオン様、今後ともあちらのルートは通らないように」（笑）

シオン : 「う……うん」

レキ : 「とにかく、我々は急いでいるんだ」

シオン : 「ごめんごめん、ちょっと待ってね。えーと鍵、鍵〜」

レキ : 「ところでその小僧は何なんだ？」

シオン : 「言い忘れました、シオン・シュタウクといいます」

田中 : 「わたしは田中といいます。ジール・田中と呼んでください（例によって名刺を出しつつ）」

レキ : やり慣れてやがる。

シオン : 「あ、これはどうもご丁寧に」

クリス : その名前を聞いて「ああ、あなたは船の中で私に酔い止めをくれた人」（クリス→田中のコネは『恩人』）（笑）

レキ : そういうのもアリか。

クリス : 「その節はありがとうございました。まさかこんなところで再会することになるなんて」

田中 : 「薬もいつでも用意してありますので」

レキ : 「私はプリムローズから派遣されたレキ」

GM : プリムローズは皆さん知っていると思うんですけど、世界的に帝国に反乱しているレジスタンスみたいなものです。

シオン : どうなんだろう、反乱すること自体はいいことだと俺は思っちゃっていいのかな？

田中 : それ以前に今日みたんじゃないの、帝国のひどい目。それ見ておいて、帝国はいい人だちだよ、とは……。

シオン : そうじゃなくて、『あんたみたいなのが来たからこの島にも……』と思っちゃうのかどっちがおいしいかなど。

GM : 民衆達はプリムローズに好感を持っていると思いますよ。帝国は圧政を敷くみたいな形だから。カバラ技術を駆使しているのも帝国なので、奈落を広げている張本人達という認識もありますし。

フリーデ : 「お二方とも、マスターが以前からおっしゃっていたお客人です」と、フォローは入れておきます。

シオン : 「ふうん、初耳だけど……いいや。じゃ、父さんの方に案内するよ」

レキ : 「よろしく頼む」

フリーデ : あ、あとクリスには「先程はありがとうございました」と。

クリス : 「いいえ、とんでもございません」

GM : ……この中で『いない子』が一人いる……。

シオン : また俺『いない子』？

クリス : （ドライに）いやいや、マーカスに会うためには必要だから。（笑）

GM : ひどい……。

レキ : 大切なコネクションだからねー。

SCENE 7 シーンプレイヤー：シオン・シュタウク（全員同行）

GM : シーンプレイヤーはシオン君です。

シオン : 段々立ち位置がわけわかんなくなっている。どうよこいつ。（笑）

フリーデ : いい感じですよ。はしっこい島の男の子って感じはしますし。

GM : 鍵を開けて家の中に入りますが、相変わらず書類やら製図した図面が処狭しと散らばっています。

レキ : 「マーカスさん。マーカスさん」

シオン : 「ああ、ちょっと待ってください。まだ寝ていると思います」

GM : マーカスは寝ていませんよ。いつもの没頭できる部屋にいますので、ここから声をかけても聞こえません。

シオン : 「父さんの研究室は奥ですので、ちょっと待っててください」

フリーデ : 玄関を閉めて、いつもより多めのバリケード築いておきます。

シオン : 「あ、それは父さんがこないだ作っていた……」

GM : どんなものを使いますか？

フリーデ : 四角くて大きくてリンゴのマークがついているディスプレイとか、半透明で中の機械が透けてみえる直方体とか。（笑）

GM : さらばアップル。

フリーデ : 「何か問題がありましたか？」

シオン : 「……いや、いいよもう。……そこに画像ファイルが……」（笑）

レキ : これは帝国に渡すわけにはいかないんだー！（笑）

GM : 研究室の手前まで来ます。

シオン : がーんがーん。「父さん、お客さんだよー」

GM : 大声で「入れ！」と言われます。中はものすごいところになっています。もうゴミ箱です。

シオン : 「父さん、この部屋にお客さん3人以上は無理だよ」

GM : 「詰め込めば入る！……って待て、なんでそんなにいるんだ！」

シオン : 「プリムローズから来たレキさんと、G=M社の田中さんという人……」

GM : 「それは知っとる！」

田中 : それを言われるといつの間にか目の前に「（名刺を出しつつ）田中です」。（笑）

クリス : さすがサラリーマン。

GM : そうすると、書斎の狭いところから手だけがによきっと出ます。「ほう、ようやく来たか。意外と遅かったじゃねえか」

レキ : 「いろいろとありまして」

シオン : 「父さん、もう外に帝国兵が来ているよ」

GM : 「もう、そんなことになっているのか……」

シオン : 「何わかったようなことを。父さんは何を研究しているんだい」

GM : 「あー、お前はとりあえず置いておく」（笑）

シオン : 「ひどいや父さん、ぐれてやるー」

GM : 「おいそこのG=M社の、物々交換が鉄則だよな。モノは持ってきたんだろうな？」と。

田中 : 「当然でございます」

GM : ケースを開けて中身を確認します。写真資料のようなものです。その書類を見ながら皆さんの前に姿を現します。

シオン : 「それで父さん、もう一人お客さんで、クリスさんという方だよ。彼女、大変な思いをして父さんに会いに来たんだよ」

クリス : 「初めまして。私、クリスと申します」

GM : 見ると、明らかに表情が変わります。しばらく呆然としていますが、手元の写真を見てもう一度確認します。「な.....なんということだ。これぞ神の導きか.....」

クリス : 「はい？」と、きよとんとした表情でマークスを見つめています。

GM : 「まあいい、どうやら帝国も迫っているようだ。急がねばならない」

レキ : 「すみませんマークスさん、とある事故でパンツァーリッターが一人死んでしましまして、こちらに来れないのです」

GM : 「そうか.....それは大変だったね。だがまあ、来ても多分役には立たなかつただろう」

レキ : あれ？ 約束が違うんじゃないのか？

GM : 「シオン、お前もついてこい。皆さんもこちらです。狭いですから気をつけて」と部屋の隅にある、何故かそこだけ何も置いていない床を開けます。どうやら階段があるようです。

田中 : おおーっ。

シオン : 「初めて見た.....」

GM : 「フリーデ、すぐ戻ってくるが見張っていてくれないか」

フリーデ : 「かしこまりました」

クリス : ついていきます。

フリーデ : 元通りフタを閉める。で、ちょっと荷物を置いてみたり。

田中 : ふふふふふ、これで戻れまい。(笑)

SCENE 8 シーンプレイヤー：ジール・田中（フリーデ以外は全員同行）

- GM** : シーンプレイヤーはあなたです。影の主人公！
- 田中** : え、俺なの！？
- シオン** : 24時間戦う田中さん。
- クリス** : 名刺が武器の田中さん。
- 田中** : 武器じゃない武器じゃない。
- GM** : どう考えても高さが6メートル以上あるくらいの広い地下の空洞に出ます。
- シオン** : 一応聞くけど、マスター……俺ら、ここに住んで何年？
- GM** : 6年でしょうかね。でも、もともとあったような形状です。
- シオン** : 「父さん……2週間ぶりの会話がこれはちょっとすごいよ……」
- GM** : 君の驚きには目もくれないで降りていきます。
- クリス** : 「変わったお父様でいらっしやいますのね。あの時、八百屋のおばさんが言いかけていたのはこのことだったのかしら」
- シオン** : 「変わったというか……」
- GM** : 中央にひときわ大きい黒い塊のようなものがあります。どうやら幌か何かがかぶせてあったようです。
- 田中** : 「これか？」ととりあえず聞くけど。
- GM** : 手前まで行ったマーカスは「そう、これが私の開発した新兵器、『アームドギア』だ！」と自信満々に幌を下ろします。そこから見せる姿のものは……。
- 田中** : 出てくるんですね、ロボットが。
- シオン** : くろがねの巨人。
- GM** : 残念。白いです。（イラストを見せながら）こんな感じです。
- レキ** : 出た。
- クリス** : 白いやつだー！
- シオン** : 「父さん、何だいこれ！こんなの造るお金どこにあったんだよー。こんなものより八百屋さんのツケ……」
- GM** : そうすると、今にも聞いてくれといわんばかりの表情をしていたマーカスは「よく聞いてくれた。このアームドギアは帝国軍の最新兵器ゲパルド・ギアと呼ばれる動力甲冑など比べものにならないハイスペックを誇る新しい兵器だ！」
- シオン** : 新兵器開発する奴っていつもそんなこと言うんだよなー。
- GM** : 「リアクター、武器、装甲、全て私独自の研究成果が込められた最新兵器だ！」
- シオン** : つまり使い道がまだわからないんだー。
- GM** : 「そう！カタログスペック上では……」全く無視しています「……あのゲパルド・ギアのスペックなど簡単に凌駕している。その比率は3対1！」
- 田中** : （冷静に）つまり3人いたらちょうど1人ですね。
- シオン** : 4人いたら負けるじゃん。
- GM** : そこ、黙れ。
- フリーデ** : 目を輝かせて聞いてくれている人はいないのかなあ。
- GM** : 「だがな、残念ながら誰にでも乗りこなせるというわけではないのだよ。リアクターを積んでいる都合で機体が搭乗者を選んでしまうのだ」
- レキ** : 「では、今ある意味がないではないか。私は何としてもプリムローズに持ち帰らなければいけないんだ」
- 田中** : じゃー乗ってみたらー？
- レキ** : 無理です（即答）。
- 田中** : 早えーよ！（笑）

GM : 「まあそれはともかくとして、目的の商品はこれだ」

田中 : ……『さあ持ち帰ってくれたまえ』と言われてもなあ。本当にスーパーロボットの発想だよな。

シオン : 「それより父さん、こんなのどこから出すんだよ」

GM : 「まあ……乗って動かすしかあるまい」

シオン : 「父さん、たった今誰にでも動かせるものではないって言ったよねー」

クリス : 今、地下6メートルにあるんですよ。

GM : 大丈夫、搬入経路はちゃんとある。奥に運ぶぐらいの大きさの通路があって……。

田中 : ああ、そっちの方に山があって、ここから運べばこー、ばばばーん。

シオン : プールが割れて。(by『マジンガーZ』か『絶対無敵ライジンオー』?) (笑)

GM : プールはない!いつもは塞いであるけれど海沿いのところから行けるようになっていきます。「とりあえず、これで商談は成立かな?」

レキ : 「何か輸送手段はないのか?」

GM : 「その件なんだがな……」と言いかけたところで上の工房が大きく振動しました。ここでシーンを切らせていただきます。

SCENE 9 シーンプレイヤー：フリーデ

- GM** : フリーデの目の前に、屋根を突き破ってゲパルド・ギアの腕と足が突っ込んできます。
- 田中** : サムがやられて吐かされたんじゃないの？（笑）
- フリーデ** : 「戦力差甚大につき撤退します」って、てったい～。
- GM** : どしんどしんと侵入してきて、君の方を見つめます。「これが開発者のマーカス・シユタウクか」……またこいつも勘違いしています。（笑）
- クリス** : どうしてヴァルキリーを間違うんだー！
- フリーデ** : 一応、《イメージプロジェクター》（ヴァルキリー1Lv特技。自身を人間に見せる）で人間っぽくはしているけどねえ。
- GM** : 「ごつい名前だから男かと思っていたが……まあいい」と、手を伸ばしてきます。
- フリーデ** : それはすいっとかわします。
- GM** : 手を伸ばす時に——これ、まんま言いたくないな——このバカ帝国兵はこんなことを言います。「少佐だって戦場の戦いで勝って出世したんだ。俺だって……！」（by『機動戦士ガンダム』ジーン軍曹）（笑）
- 田中** : これは拷問だ、マスターへの拷問だ。マスター可愛そうー！（笑）
- GM** : ……が、地下6mの空洞があるところでゲパルド・ギアの重量を保っていらられるわけがなく、足元が崩れてあなたと一緒に落ちます。
- フリーデ** : うわ、選択の余地なしかー！
- GM** : あなたは飛べるんで、体勢を立て直すことはできますよ。
- フリーデ** : では立て直して着地します。「突き破られました！」とは言ってみる。聞こえるかなあ？
- GM** : ではそこでシーンを切らせていただきます。——本当にこんなことが書いてあるんだよー！
- フリーデ** : 今後もずっとそんな感じなんですか？
- GM** : 今後はいろいろと。けど第一話とはとにかくカンベンしてくれよっていう……。何だよ、この1年戦争大好き人間の書いたシナリオ！（笑）
- シオン** : やっぱ俺は富野ちっくにいくしかないんだ。
- 田中** : でも2話目からはまともなんだよね？
- GM** : ……多少は。（笑）

【クライマックスフェイズ】

SCENE 1 シーンプレイヤー：なし（全員同行）

クリス : いきなり天井に穴あくシーンからはじまるんですか？

GM : ええ。揺れる音からずしーん！どーん！という音が聞こえて、ばきっ、がらがらがらっという音と共にガレキが落ちてきます。

田中 : 破られましたー、の声も入るんだよね。

GM : か細い「……ました〜」という声が聞こえる頃に、上からゲパルド・ギアが落ちてきます。

クリス : 「きゃー」と言いながらよけます。

GM : 向こうも姿勢制御があるので、ちゃんとバーニアをふかしてオートバランスを保ちながらヴィン、って着地。

田中 : 石とか、いっぱい落ちてくるんだよね？

GM : ええ。ちなみにガレキがシオンの真上に落ちてきます。くらったら死にますね。何かします？

クリス : あー……。

GM : 運悪く、他のキャラクターは救える距離じゃありません。

田中 : 別に救わないし。

フリーデ : 「シオン様ー！」とは言っておきます。

シオン : 逃げる場所はあるかな？

GM : ないね。

田中 : 新しいキャラクターシートを用意しましょう。（笑）

GM : クエストじゃないからブレイクするわけにもいかないしねー。

シオン : せいぜいやれることがあったら、「フリーデ！」と叫んで終わり？

フリーデ : ……そこで叫ぶ名前は違うんじゃないですか？

GM : 走馬燈のようにぱーっと巡るわけですから何でもいいですよ。フリーデでも父さんでも、うろ覚えにしか覚えていない母親の……。

シオン : 「サムうー！」

GM : サムだけはないね。（笑）

シオン : わかったわかった。じゃ、「フリーデ！」と叫びながら、心の中にあるのは見たことのない母親の像ということで。

GM : 次の瞬間、君の視界が真っ黒になったかと思うと、君はどうやら無事のように。

シオン : ここは……？

GM : 別の人間がガレキに潰されています。どうやらマーカスのようです。

シオン : 「父さーん！」

GM : マーカスは科学者とはいえ大人なので、あと突き飛ばした方なので即死ではなかったようです。ただ絶命するダメージを負っています。

シオン : 「父さん、なんでこんな……！」

GM : 「息子を守るのが親父の役目だ……」

シオン : 「こんな時に父親ヅラしないでくれよ！」

GM : 「なんて顔をしているんだ。一度ぐらいは親父らしいことをさせろ」と言って、げふっげふっ。

田中 : 『げふ』って言っちゃったよー！

クリス : BGMはピアノ調ですな。

シオン : 「父さん、一度だなんて……一度だなんて嫌だよ！もっと話し合おうよ！」

GM : 血の気がなくなってきたようで朦朧としながら「今はそんなことを言っている場合じゃないだろう。あの……アームドギアに……お前が乗るんだ！」

全員 : ……。 （それぞれが笑いと突っ込み欲求を自制中）

シオン : 「と、父さん、何言っているんだよ！」

GM : 「乗ればわかる。今あれを動かせるのはお前しかいない」
全員 : (必死に何かをこらえている)
GM :俺も辛いんだよ！ (笑)
田中 : じゃ、俺も「.....左手をケガしてしまった.....くうっ」 (笑)
クリス : クリスは都合良く気を失っていますのでよろしく。
フリーデ : 「マスター！」と叫びながら駆け寄っていく感じで。
GM : 親父が目の前でそんなになっているわけだから、絶叫モードだよな？
シオン : あ。「父さーん」 (←とりあえず絶叫してみた)
GM : そうすると、アームドギアのリアクターが光ってあなたの体に降り注ぎます。
全員 : ぴかーん。
シオン : ただいま被爆中。 (笑)
レキ : 「な、何なんだこれは!？」
GM : ごめん、これから更にみんなを苦境に追い込むことになるけど、これも設定だ、許してくれ！
田中 : いや、別にいいけど。
GM : リアクターの中にはシャードがあったようです。それが彼に移る。どこかで聞いたことのある懐かしい優しい女性の声がある。
シオン : 時が見えるよ、父さん..... (by『機動戦士ガンダム』) (笑)
GM : シャードのしるしがぴかーんと光り、あなたはクエスターとして覚醒することになります。
田中 : 『いる人』になったー！ (笑)
クリス : その光で気がつきます。「はっ。一体何が!？」
GM : それを見てマークスは「全てが揃った.....。さあ、動かして.....私に.....お前の勇姿を見せてくれ」と言うよ。
シオン : 「父さん、そこで待ってて。今すぐ助けるから.....！」
GM : さすがにしゃべるのも辛くなってきているんだけど、笑顔で応えます。
フリーデ : 眩しさに目を細めて見上げながら「これは.....！」
シオン : OK、乗るよ。私もここで頑張らねばならないでしょう！「わかる、わかるよ父さん！この動かし方が！」 (笑)
GM : 当然動かし方は知っている。自分の体のように動かすことができます。そうするとですね.....。
シオン : ま、まだ苦しめるんですか？ まだくるのか!？
GM : 目の前にゲパルド・ギアがいるわけですから、乗っている帝国兵が驚きます。「こ、こいつ、まさか動くのか!？」持っているM64マシンガンを撃ちます、ドドド。「何い、M64が効かないのか!」 (笑)
フリーデ :う.....うちにどうしろと。 (笑)
田中 : いや、ほら、だって主人公がなんかやるだけだから、観客だから.....。
フリーデ : そ、そうじゃなくって、プレイヤー的にこの場でどうしろと.....！
田中 : きもち下がってください、3 m、きもち後ろに下がって。そして冷たい目でこちらを.....。 (笑)
GM : マークスさん危ないんで、誰か助けてください。
フリーデ : あ、わたし行きます。
クリス : 行きまーす。もうヒーリングもだめっばい？
GM : ヒーリングじゃ無理ですね。加護なら何とかなるかもしれません。使ってもいいですよー。
シオン : こんなところで加護使っちゃ美しくないよ。やっぱここは死ななきや、父さん。 (笑)

田中 : 活かしておけばこーんな四角い箱作ってくれるよ、多分。（『機動戦士ガンダム』でお脳の沸いたアムロパパが作ってた役立たず回路のこと……かな）（笑）

レキ : 生かせー。生かせー。

田中 : だんだん仲良くなって、途中で殺される方が盛り上がるじゃん。

フリーデ : ここまで仲良くなったんだから今が死に時ですよ。無駄だとわかりつつ《ヒール》だけかける感じで、MPだけ減らしておきまーす。「マスター！マスター！」って。

クリス : 私もー。

田中 : ひどいなー。

GM : 目が見えにくくなってきたのか独り言のようにしゃべります。「……ああ、そうだ。アレには母さんの……母さんのシャードが入っている。私には聞こえなかったが、シオン、お前には聞こえたのだな……」

田中 : やっぱエヴァも入っているんだね。

GM : ここでようやくクエストが与えられます。『ゲパルド・ギアを倒す』。

シオン : 了解しました。

レキ : それだけかよー。

クリス : 私はてっきり、岩が降ってきたら親父が助けるんじゃないくてアームドギアが勝手に動いて手をかざすと思っていたんだけどね。（笑）

田中 : こーゆー感じで。（みんなで手を前にかざしつつ）

GM : ごめんなさい、それに近い描写がありましたけれど俺が省きました。そんなところまでやってられるかー！（笑）

シオン : でもこれさ、付き合おうと努力しないと辛いね。マスターも大変だね。

田中 : マスターは大変だ。俺だったらもっと調子に乗って綾波とか出したかもしれないけど。

フリーデ : シオンがお父さんに「心配ない、予備はここにいる」とか言われたり？

シオン : やってて思うんだけどさ、ほんっとスイッチ入れないと辛いねー。

フリーデ : スイッチ入れるとできるもんなんですか。

シオン : 無理矢理入れましたよ、スイッチ。

田中 : スイッチ入れても俺にはできなかつたな。俺逃げたよ、多分。『僕にはできないよ、父さん！』とかって。（笑）

GM : プレイヤー逃亡。

フリーデ : いやー、感動的な親子の別れのシーンでしたよ。

GM : これがあと5話もあるんだよ。

田中 : 1話でもう十分おなかいっぱいだよな。

フリーデ : 私も……。そろそろ胸焼けしそう。

GM : やめるやめる？ キャンペーンやめる？

フリーデ : あと5話くらいやってから決めましょうかね。（笑）

シオン : 5話やったら終わってるし。お腹いっぱいかもしれないけど楽しそうだよな。

レキ : あと何が入るんでしょうね。ガンダムにエヴァに……。

SCENE 2 シーンプレイヤー：なし（全員同行）

田中 : ほんとロボで戦うんだな。ファンタジーゲームなのに。（笑）

フリーデ : っていうかこの博士、お母さんシャード入りのメカを反乱軍に売り飛ばそうとしていたんですかね？

田中 : それは後からわかるネタですよー。（笑）

シオン : 僕をセットで売ろうとしていたんですよ。ひどいよ父さんー！（笑）

GM : 立ち上がると、懐かしいけれど覚えていない声が聞こえます。「さあ、共に戦いましょう」

シオン : 「見てて父さん！父さんがつくったものはあんなものより強いよ！」

クリス : 今日はいつにない頑張りをを感じるよ。

GM : そして目の前にゲパルド・ギアが一機。乗っている帝国兵は顔が見えるんですが、憎らしそうに「あれがマーカスが開発した新兵器か！畜生、俺の兵器が全く役に立たねえじゃねえか！」と、その場所から退こうとします。

シオン : 殴りつけます。

GM : 俺の拳が光ってうなって轟き叫ぶ！（by『機動武闘伝Gガンダム』）

フリーデ : なんか違うものが混じり始めましたよ？

GM : マーカスはまだ下にいるんで、ここで戦闘をしていると崩れるぞ。

シオン : わかった。奴を殴り飛ばしてそのまま掴んで、外に引きずり出します。

GM : じゃ、ダメージだけくれ。

田中 : 一発で倒さないとカッコ悪いよー。

シオン : 了解しました。素手のまま殴りつける。《猛攻》（ファイターLv1特技。ダメージに+1D6）発動～。（ころころ1と2）ダメージ低一。〈殴〉の7で。

クリス : まだちょっと慣れていないんだね。

シオン : 「父さんが作ったアームドギアだ！」とか言いながらやればいいんだろ！（笑）

GM : （イラストを見せながら）ゲパルド・ギアはこんなデザインをしているんですが、上のヘッドガードみたいなのがへしゃげて役に立たなくなるのかな。そのまま殴り倒す形で岩みたいなのがあったところが崩れて外に出ます。

田中 : 倒した？

GM : まだです。上部の装甲が削れて相手のパイロットの顔だけが見えている状態になっていますが、まだ動いています。

シオン : そこでパイロットをくちやっとならしたらヒーローじゃないよね？

田中 : それ、別な意味でヒーロー。（笑）

GM : 海辺にちょうど出るような形になるんですけど、さらに2機のゲパルド・ギアが。

田中 : ああ、裏側に回っていたみたいだね、いい感じだ。

GM : ゲパルド・ギアだけでなく兵士達が入ってくる。1グループ10人体制の連中が7グループ。下の皆さん、頑張ってください。

レキ : 赤いのは出てきました？

GM : 赤いのはまだ出てきません。

■戦闘II VSゲパルド・ギア装備の兵士、ゾルダード（モブ）■

〔行動順〕 行動値9ジール・田中クリス

行動値7シオンフリーデゲパルド・ギア装備の兵士×3

行動値6レキ

行動値なし モブのゾルダード（10人×7グループ）

GM : モブとはいえ7組いると厄介かもしれないですが、ちゃっちゃとやっちゃってください。

田中 : こちら辺はガラクタとかありますか？ そこに隠れます。

クリス : 私はマークスをどうするかによるんですわ。岩は持ち上げられないかな。

GM : 3人がかりでやればズラすことはできるんじゃないかな。

フリーデ : なら戦闘中は諦めた方がいいですね。じゃ、クリスには「わたしの後ろにいてください」って感じで。

クリス : じゃ、降りてきた人達に《ファイアアロー》（ブラックマジシャン1Lv特技。〈炎〉2D6ダメージ）でいこう。（ころころ）ええと、命中11。

GM : （ころころ）ごめん、回避成功した。

フリーデ : 集団ではじき返した？

クリス : 途中で外したかなんかしたんだ。

GM : そうですね。まだ戦闘というのが初体験みたいな感じで。

クリス : 「どうしましょう、きゃーっ」って。

シオン : まあヒロインっぽい。

GM : 次、クエスターとなった君！

シオン : 斬りかかってみます、武器を見つけましたので。ガンブレードくらいやがれー。（ころころ）とりやっとなんか命中が14。

GM : 14かよ、カンベンしてよー。

田中 : 強いんだね、やっぱり。

GM : これで弱かったら問題ありますもん。（ころころ）当たり。回避できるわけねー。

シオン : とりあえず《猛攻》（ファイターLv1特技。ダメージに+1 D6）ー。（ころころ）18点、〈斬〉。

GM : オーバーキル……。本当は固いんですよ、ゲパルド・ギアって。ふざけんなって感じですよ。

田中 : やっぱ白い奴だから。大地に立ったから。（笑）

GM : ぼーんという音と共に「そ、そんなバカな……！化け物か！」という声を残して壊れます。

シオン : あの白い奴は化け物か！（by『機動戦士ガンダム』）

GM : 次はフリーデさん、行動できます。

フリーデ : 2番グループに攻撃いきまーす。《ディスチャージ》（ヴァルキリー1Lv特技。武器属性を〈雷〉にする）で攻撃属性を〈雷〉にしてブロードソードで攻撃。（ころころ）15。

シオン : うちの家政婦さんは化け物かー！（笑）

GM : （ころころ）ください、どうぞ。

フリーデ : いきまーす。（ころころ）あ、低い。〈雷〉の11。

GM : 雷属性はないんで、1グループケシズミになって消えます。さすがに他のグループが「こいつはまずい！」って言い始めます。

レキ : 次、6～。

GM : いや、残念ながら7はまだいるんです、2体のゲパルド・ギアが。射程50mの64マシンガンがあるんで、斉射します。（ころころ）【命中】う……9と8。

シオン : （ころころ）……。

田中 : サイコロで勝ってるじゃないですか。（笑）

GM : 「なんだあの機敏な速度は！これが新兵器だということか！これほどの差があるのかー！」

シオン : 「父さん、これすごいよ！」って言うておけばいいんだね。

レキ : 次、6で一す。3番に攻撃。（ころころ）12とって斬りました。

GM : （ころころ）ごめんなさい、回避しました。

レキ : 目が低かった。

シオン : 出目が4で12? 【命中】8もあるんだ? 俺だってアームドギア着て9だよ。
GM : じゃ、あなたの切っ先はかわして「こいつはたいしたことねえぞ!」と言います。(笑)
レキ : むか。

その後帝国ゾルダードはこちらにエンゲージ。
次ラウンド、隠密状態だった田中がゲパルド・ギアを直接攻撃。

田中 : キャノンで攻撃します。射程25mあるんで、多分大丈夫だと思う。ザコ1匹かっこよく決められたらいいなーという。
GM : 25m.....まあ、ぎりぎりとしましょうか。
シオン : かっこよくいきましょう。命中したら《トール》(ファイターの加護。ダメージロールに+10D6)が待ってますんで。
田中 : いきますよ、攻撃一。(ころころ)19。《奇襲攻撃》(スカウト1Lv特技、ダメージ+3&クリティカル率UP)だし。
GM : 19!?(ころころ)そんなの当たりますよ。
シオン : じゃ、ダメージロールの前に《トール》と言っておこうかな。
田中 : 任せますよ。
GM : 《トール》入りましたー。[10D6+ダメージロール]なので、実質11D6。
田中 : 11D6+11になるのかな。(ころころ).....低い? 39+11だから50点の〈刺〉。
フリーデ : 11D6の期待値は38.5だし、ちょうど期待値ですね。
GM : そんなの受けられるわけないじゃん!一発でコクピットを撃ち抜きました。「何いつ、また伏兵がいたのか!?!」
田中 : 「坊主、戦い方はまだまだだな」(笑)

これでゲパルド・ギア対アームドギアは1対1。
初太刀はファンブルしたものの、シオンは善戦。
フリーデ、レキ、田中も、何とかモブを70人から15人にまで減らす。

シオン :では(ころころ)16とって斬ってます。
GM : ちょうど墜ちました。「ぐぶっ」と血がぶしゃっとふきます。真っ白な機体に真っ赤な血が。
シオン : 「この機体は奴らの血で染めてやる.....!」
GM : ここでとりあえず戦闘は終了させていただきます。
シオン : え、まだ残っているよ?
GM : ゾルダードが1.5グループいてもどうしようもないし、ゲパルド・ギアもやられたし。

加護について

キャラクターは、それぞれのクラスに応じた「加護」と呼ばれる強力な力を持ちます。これはクラスレベルに応じて取得できる、より一般的な「クラス特技」とは異なり、より絶対的な効果があります(「トール」はダメージ+10D6など)。
基本的に、「加護」は一人につき3つで、「加護」ごとに能力が決まっています。

SCENE 3 シーンプレイヤー：なし（全員同行）

- GM** : ゾルダードは戦意を喪失して「もうだめだ」と。頼みの綱であるゲパルド・ギアを墜とされたし。
- シオン** : じゃ、俺は倒した奴を振り切って、父さんの元に向かう。
- GM** : 戻ろうとすると、後ろから入り口の手前に真っ赤な巨体が立ち塞がります。それは最初見た時にあまりに高速で飛来してきたので火の玉かと思います。赤いゲパルド・ギアです。
- シオン** : 「そこをどけ！」
- 田中** : 赤い彗星の……！
- フリーデ** : いやいや火の玉火の玉。今回は火の玉。
- 田中** : 赤い火の玉の……！（笑）
- GM** : あなたに《絶対先制》（帝国軍専用特技。セットアッププロセス時にアクションを1回行える）攻撃いきます。高いよこいつ（ころころ）20。
- シオン** : おっけーおっけー、《ヘルモード》（パンツァーリッターの加護。シーン内のどこでも移動でき、防御をクリティカルに出来る）。彼の脇に移動します。
- GM** : ちなみにその光景はあなた方からも見る事ができます。ちなみにクリスさん。見たことありますね。
- クリス** : 反応しなきゃいけないのねー。「あ、あれは兄さん！」って感じで。
- GM** : 赤いゲパルド・ギアが来たことによって、諦めかけていたゾルダードたちも「アイン様に来てくれた、この戦い勝てるぞ！」と戦意を取り戻し戦闘に参加します。
- レキ** : 「アイン！」
- GM** : で、これからまた戦闘に入らせていただきます。

■戦闘III VS “灼熱の”アイン、ゾルダード（モブ）■

[行動順] 行動値20アイン

行動値9ジール・田中クリス

行動値7シオン、フリーデ

行動値6レキ

行動値なし モブのゾルダード（10人×1グループ、5人×1グループ）

- シオン** : こっちが早い？
- GM** : 何を言う。こいつ【行動値】20もあるんだ。
- シオン** : さすが3倍！
- 田中** : これはしょうがないです、通常の3倍ですから。しょうがないですよ。
- GM** : 「ほう、よくかわした。だがこの私の動きについてこれるかな？」と不敵な笑みを浮かべて君に攻撃します。（ころころ）【命中】26一。
- シオン** : ちくしょー、くらうにきまつてるじゃないかー。（ころころ）ムリ。くれや。
- クリス** : 《マジックシールド》いる？
- シオン** : いらんいらん。
- 田中** : だって1しか出してくれないんでしょう？（笑）
- シオン** : ヒロイン像を壊さないよう、俺が生身の時だけシールド許可。そうすれば1点でも2点でも『ありがとう、クリス』って言えるから。それ以外は回復に回ってください。
- GM** : ダメージいきます。（ころころ）そんな高くないかな。18。
- シオン** : 大したことないじゃん、1点残っているよ。まだブレイクもしない。
- 田中** : 1点残っていればこのゲーム関係ないからねー。
- GM** : 一撃で葬れなかったので意外そうな顔をします。「ほう……この攻撃を受けてもまだ立っているとは」

田中 : 次、9だ！
GM : ちなみにまだあなたの目の前には15体いますんで。
田中 : うわ、助けに行けねー！

田中とフリーデはモブのゾルダードを攻撃。
アインのコネクション「憎悪」のあるレキはゾルダードから離れてギア戦へ。

シオン : レキさん、走るんだったら何か一言お願いします。
レキ : 「アイン！あの日のことは忘れんぞー！」と、走って終わりかな。
田中 : なんかあったの？
レキ : 何かあったらしいですねー。

2ラウンド目。

GM : ここまできたら徹底的にお約束行動を取らせていただきます。アインは「お前、まだ戦闘慣れしてしないな？ なら、これはどうだ」と、壁を蹴ってケリをかましてきます。(笑)

田中 : おー、かっこいい。

GM : ちなみにこの攻撃は《フレイヤ》(ヴァルキリーの加護。攻撃の命中判定をクリティカルにする)で絶対命中とさせていただきます。やっていることは蹴りだけど扱いは殴りで。それに《トール》。

シオン : 「こいやー！」

田中 : 《オーディン》(ブラックマジシャンの加護。加護ひとつをうち消す)はしない方がいいですね？

シオン : なしの方がいいでしょう、まだまだこんなところで使っちゃダメ。《トール》こーい。.....ダメージ聞く前に『ブレイク』って言うのは卑怯だよな？(←残りHP1)

レキ : 言ってもいい感じですけど。

田中 : 言っちゃだめですねー、申し訳ない、ルールなんで。(笑)

シオン : 俺もセリフ言ってからじゃないとブレイクできないし。

田中 : そうですね。少年らしく、かつ熱く。

シオン : 熱く.....。(既に息切れしている)

フリーデ : だ、大丈夫ですか？

クリス : 今度はセリフとかも考えておかないと。

田中 : そうですね。1年戦争、もう1回振り返っておいてください。(笑)

GM : (ころころ)46のダメージ。(笑)

シオン : 「そ.....そんなところから蹴りを！」

クリス : 「きゃー、シオンさんー！」とか言いながら出てくる。

シオン : 『ブレイク』だけど、ここで1回は倒れておきますー。

クリス : なんか言った方がいいですか？

シオン : 俺の行動番に何か思いついたら言ってみてください。

クリス :思いつかないんだけどなー。

GM : しょうがないですよ、こういう時はあっぷあっぷになりますから。

シオン : わかりました、じゃ、私の攻撃は一番最後にもっていきましょう。

モブなゾルダードは全滅。あとは全員でアインとの戦闘状態に。
とりあえず、レキが斬りかかる。

GM : どうぞお好きなように。加護を使ってもいいです、何をしてもいいです！

フリーデ : 《フレイヤ》（ヴァルキリーの加護。攻撃の命中判定をクリティカルにする）いきましようか？ これ自分以外に使えますし。

レキ : いや、取っておいた方がいいでしょう。私、主人公じゃないんで。

クリス : でも、まだこっちに《フレイ》（オラクルの加護。加護ひとつをコピーして使用）があるし。

フリーデ : あ、そっちはそっちの方が美しいよ。じゃ、こっちで《フレイヤ》使いましよう。

レキ : じゃ、「友の仇ー！」……どうしよう。

フリーデ : 《トール》（ファイターの加護。ダメージロールに+10D6）？ 《トール》？

シオン : 《トール》いつときましよう！

レキ : じゃ、《トール》で、飛び上がって思い切り真上からがーっ。

GM : それに対して《ヘルモード》（パンツァーリッターの加護。シーン内のどこでも移動でき、防御をクリティカルに出来る）。逆噴射でギュイイイイイン。

シオン : そうか、《トール》を発動してダメージロールが確定した後も《ヘルモード》使えるから、《トール》ももっていかれるんだ。

GM : その通り。

田中 : でも、気迫を乗せるにはこのくらいしないとね。

……と、軽く前哨戦を入れた後で本命、ブレイク中のシオン。

シオン : (クリスに) 何かあればどうぞ。

クリス : えーと、「シオンさん、シオンさん！あなたのお父様が造った機体は！あなたのお母様が残した魂は！そんなものではないはずです！」

フリーデ : セリフはいいんだけど、どんどん声が高くなってきて辛そう。(笑)

クリス : 結構辛い。

フリーデ : でもよく頑張った。

シオン : 「ありがとう、クリス。目が覚めたよ」と言って立ち上がります。

GM : じゃ、それで立ち上がったでいいよ。

クリス : じゃ《フレイ》（オラクルの加護。加護ひとつをコピーして使用）で《フレイヤ》コピー。

シオン : 「この一撃で決める！」とか叫んでおきましよう。命中クリティカルー。そちらの回避行動がなければダメージロール前に《トール》発動します。

GM : さすがに今回はアレなんで、《トール》を発動される前に更に《ヘルモード》で逃げます。

シオン : うわお。

クリス : それを《オーディン》でうち消します。「兄さん、もうやめて！」と。(笑)

GM : 「これでやられる私ではない！」と、更に《オーディン》で打ち消し。

田中 : どうする、やっどく？ えーと、《ツクヨミ》（ニンジャの加護。他人の加護を使用させる）で《オーディン》を起動させてそっちの《オーディン》を更にうち消す。

クリス : 「させはしない！」って感じで。

GM : わかりました。じゃ、その《オーディン》に対して更に《オーディン》でうち消します。

クリス : いくつあるんじゃ、《オーディン》！

シオン : これでそちらの回避が確定しているから……。エージェントの《エーギル》（エージェントの加護。対象の判定をファンブルに変更させる）で回避ファンブルは？

田中 : あ、うち消すことが出来るな。そうだね。《エーギル》で回避をうち消しますよ。

GM : わかりました。更に《フレイ》で、コピーした《オーディン》で回避。――一応言っ

おきます、もう安心していいよ。(笑)

シオン : いやー、すごいことになったねー。

GM : じゃ、斬撃はかわします。さすがに意外な表情をします。「なんだこいつ、突然動きが早くなった！」と。(笑)

田中 : あわあわやったけど何もできなかった我々。

シオン :いくらなんでも疲れてきました。

田中 : 見ている方が疲れるもん。最初から最後まで毎回コレだったらどうするよ。

GM : 安心してください、こんな濃い話はとりあえず1回目くらいです。あと最終話一步前くらいになるとまた濃くなっていくけど濃さの次元が違いますんで。

シオン : なんでアルシャードが『熱血専用！』なんだよー。

この時点で残った攻撃系加護は《トール》1枚。

3R目は全員でアインに対してフクロ叩き状態。《トール》でシオンが再び昏倒。

フリーデ : 「さあ、立ち上がってください！」と、《イドウン》(ホワイトメイジの加護。キャラクター一人を復活させる)。

シオン : 「父さんの造ったもの。母さんの魂が宿っているもの。簡単に壊れるものかー！」(笑)

田中 : あんたら恥ずかしいよー。じゃ、《ヘイムダル》(スカウトの加護。自分の判定をクリティカル)で命中クリティカルにして攻撃します。

シオン : どうしよう。《トール》、いく？

田中 : いきましょうよ。もう倒そー。

シオン : じゃ、《トール》——えーと、じゃ、私も何か言わなきゃ。「田中さん、僕では隙を作るので精一杯です。お願いします！」、これで第一話俺は『いらぬ子』一。(笑)

クリス : いいぞー。いいぞー。

田中 : ありがとうございますー。(ころころ)54の〈刺〉です。

GM : ごめんなさい田中さん。あなたが破壊したのはチェーンソードだけです。——つまり《ティール》(ハンターの加護。自分が受ける実ダメージを0にする)を発動させていただきます。

田中 : うわ————っ。

クリス : 《ティール》ってどんなの？

フリーデ : ダメージ打ち消し。

クリス : うわ————っ。

シオン : これは第一話、奴、倒せない話かもしれない。

GM : いえ、一応倒せる話らしいです。さすがに今には焦ったらしく「今はさすがに焦った」と言う。——最大の見せ場は主人公に残った！

田中 : おお、そうだ！やっちまえー。

シオン : でももう《トール》ない。

GM :なんもないの？ みんななんもないの？

クリス : 《イドウン》あるよー。

フリーデ : 《ティール》あるよー。

レキ : 《タケミカツチ》(サムライの加護。自分の受けたダメージを相手にも同時に与える)あるよー。(←どれもこれも攻撃に使えない)

というわけで加護も尽き、消耗戦というか泥仕合の様相を呈してきた戦闘。

みんなでちまちまとダメージを与えて相手の耐久力を削っていく、地味な展開に。

田中 : 15点とって切りました。

GM : トドメは君だ！

シオン : 当たればな。ファンブルだけは勘弁な。

GM : ここでちょこっと演出も踏まえようか。どうやら足の車輪をやっちまったらしいです。——これでかなり【回避】値下げしましたんで。

シオン : セリフを言ってからダイスを振ると切ないことになるんで、ダイスを振ってからセリフを言おうかな。

田中 : それは基本ですね。

シオン : (ころころ) 16とって命中しかけています。

GM : (ころころ) よかったね、回避されてないよ。

シオン : おっしや。「これで決める！！」

フリーデ : 確かにそれは命中を決めてからじゃないと言えない台詞ですね。

シオン : 《猛攻》も入れます。

クリス : 1ゾロだったりして。

シオン : (ころころころ1と1)。14の〈刺〉。(笑)

フリーデ : すごい、オラクルの神託ってこんなに当たるんだ！ ばっちり当てたよ！(笑)

クリス : そ、そんなつもりじゃ.....。

GM : でもよかったね、それで墜ちたよ。ゲパルド・ギアの動力部、といってもコクピットとは違う部分を貫いた。アインは《ヘルモード》で脱出します。

レキ : 「逃げられたか！」

GM : 皆さんから見えないところ、島の裏手に潜水艦が控えていて、アインの姿があると思いいねえ。彼は「行く手を阻む者はたとえ手を汚してでも取り除く」と言ってきびすを返して船に入っていきます。

SCENE 4 シーンプレイヤー：シオン（全員同行）

シオン : 「父さん、今、助ける！」と言って岩を除けるよ～。

クリス : 岩を乗っける？（笑）

GM : ぐしーっ。見えないところから血がつつーっ。（笑）

シオン : 父さん、これが父さんの墓標だ……！（笑）

田中 : 最後はやっぱりそうだったか。

GM : マーカスさんは致命傷を負っているのがわかります。鉄骨みたいなのが器官の大事な場所を貫いていて、逝く寸前です。

シオン : 「父さんの造ったアームドギアは敵を倒せたよ！」

GM : 「見ていたよ……お前の勇姿を」もう見えるわけもないんですけどね。血をぶしゅっと吐きます。

クリス : （冷静に）死なないでの一言でも言ってくれー。

シオン : （冷静に）ちょっと言えなーい。

GM : 「すまんが……そこに彼女は……、クリスさんはいるか？」

クリス : 「はいっ、マーカスさん！」

GM : そうすると、マーカスは胸の裏ポケットから指輪を出します。グリフィンの意匠が彫り込まれた指輪で、それを彼女に渡します。

レキ : マスター、それ、見れますか？

GM : 見えてもいいですよ。

レキ : 「そ、その指輪は……！」

クリス : 「ご存知なのですか？」

GM : マーカスは自分の言いたいことだけ言っちゃいます。「あなたが……無事で……よかつ……」と言って事切れます。

シオン : そこで《イドウン》。（笑）

田中 : 《イドウン》なんてしたら、べらべらしゃべっちゃうじゃないですかー！

GM : それでもいいですよー。

フリーデ : いやあ、ここはすっぱり死んでもらいましょう。「マスター、マスター、まだ亡くならないで下さい！ あなたは、あなたにはまだ……！」

シオン : 「フリーデ、父さんはもう寝たいんだよ。眠らせてあげよう……」

GM : ここでマーカスの心理描写。『これで、お前の元に行けるな……』という感じで、亡くなります。

【エンディングフェイズ】

SCENE 1 シーンプレイヤー：シオン・シュタウク

- GM** : シーンプレイヤーはシオンですが、レキもいます。シオンは傷心でちょっとぼーっとしている状態ですが.....。
- シオン** : あ、そうだったんだ？
- GM** : 別にどっちでもいいけどね。
- シオン** : 途中で母さんと戦えたので前向きになってたんですが、じゃ、さすがに死んだので.....。
- GM** : あなたは最初の依頼があるわけですね。.....というわけで、よろしくお願ひします。
- レキ** : 立っている後ろから肩を叩いて「シオン君、マーカスさんは残念なことをした。私たちがもう少し早く来ていれば.....」
- シオン** : 「大丈夫です。父さんはちゃんとやりたいことをやりました。それに、ちゃんと成果も残しました。最期は笑って死んだんですから」
- 田中** : ほんとかよー。嘘くせー。
- シオン** :お願ひです、お願ひですから.....！茶々入れられると挫けますー。
- GM** : ここは耐えるところです。
- 田中** : だってさー、耐えらんないんだもん！（笑）
- レキ** : 「シオン君、これからその機体と一緒にプリムローズに来て欲しいんだが」
- シオン** : 「父さんの遺志も、そうだったと思います」
- レキ** : 「あの機体をあそこまで扱えるのは君だけだ。一緒に戦ってくれるか？」
- シオン** : 「僕が出来る限り」
- レキ** :あれ、アームドギアはどうやって持っていくことになっていたんでしたっけ。
- GM** : 一応、ホワイトスネイクで持ち運ぶということになっています。
- レキ** : 「では、これからこの島を出て船に乗って欲しい」
- シオン** : 「はい」
- レキ** : 「よろしく頼む」
- GM** : では、あなたはプリムローズに行くという決意を.....。
- シオン** : 固めました。
- GM** : 翌日、ホワイトスネイクの出発時間が迫って、あなたは船内の窓から町を眺めています。何か想像するものがあれば。
- シオン** :コソっとしたの.....。（笑）
- GM** : そんな感じで、あなたはプリムローズに迎え入れられ、これからホワイトスネイクに乗って本部の方に行くという形になります。
- クリス** : ——よく頑張った。よく頑張ったよー。
- シオン** : ほめてくれ。（笑）

SCENE 2 シーンプレイヤー：クリス

- GM** : 時間軸をちょっと戻させていただきます。あなたはレキがグリフィンの指輪について知っているようだったので、やっぱり彼といいます。
- クリス** : はい。
- レキ** : そこで振ってくるだろうなあとは思った。
- シオン** : 大活躍じゃのう。
- クリス** : 墓の前に佇む2人を遠くから見ながら脇にレキさんを脇において、「私の兄さんのせいでマーカスさんが.....神様、マーカスさんに会えというのはこういう事だったのですか？」と。そしてレキさんの方を向いて「レキさん、あなたは兄を知っているようでしたけれど、兄は一体何者なんですか？ あのグリフィンの指輪について何かご存知なのですか？」
- レキ** : 「あいつの名前はアイン。今はそう名乗っています」
- クリス** : 「アイン.....。兄の名はアイン」
- レキ** : 「昔、こちらの組織に入る前に友と一緒に戦ったのですが、私の友人は奴にやられてしまいました.....」
- クリス** : 「なんと」
- レキ** : 「君の兄さん、と思われる人物は帝国の中でもかなりの地位を占めています。しかも腕利きだ」
- クリス** : 「私は自分の記憶の手がかりを探しています。そのためにマーカスさんにも会いに来たのです」.....ちょっと矛盾しているかもしれないけど。
- GM** : まあ、正しいですね。
- レキ** : 「もし本当にあいつが君の兄さんだとしたら、我々は敵としてではあるが追いかけてはいる。一緒に来てくれればそちらにも都合がいいのではないか？」
- クリス** : 「これ以上、兄にあのようなことを続けさせるわけにはいきません。レキさん、私も一緒に連れて行ってください」
- レキ** : 「こちらとしてもメンバーが増えるのは歓迎だ」
- クリス** : 「泥棒はできないけれど、きっと覚えます」(by『カリオストロの城』クラリス) (笑)
- シオン** : 言っちゃったー。
- クリス** : 泥棒じゃないや、「戦いはできないけれど、きっと覚えます」
- レキ** : 「ところでクリスさん。先程マーカスさんから最期に渡された物、あれをもう一度見せてもらえないでしょうか」
- クリス** : 「はい、これでしょうか？」
- レキ** : 「やっぱりこれは.....」
- シオン** : ここでシーンを切るとかっこいいよね？
- GM** : いいですよ。じゃあ、そこで切りましょうか。
- クリス** : 一体何だったんだー？
- GM** : 彼はその場では続きを言いませんでした。で、今はホワイトスネイクの甲板で沈む夕陽を眺めています。
- クリス** : ーえ、私？ あ、まだ続いているのか。
- GM** : 続いているよー。深紅に輝く夕陽が赤いゲパルド・ギアに乗ったあなたの兄であろう人物のことを連想させます。
- クリス** : じゃ、心の中で「兄さん.....、きっと私が止めてみせる」と思いながら。

SCENE 3 シーンプレイヤー：ジール・田中

- GM** : あなたは一足先に専用の船でG=M社に戻り、情報処理部長のところにいますね。
- 田中** : じゃ、大体見当はついているんで、「どういうことですか！」から入ろう。(笑)
- GM** : 「どっかから知らないけど漏れていたんだよね、情報。でも、君じゃなきゃ無事に帰って来れなかっただろう？ 人選は正しかったと思うんだ。依頼は果たしたわけだし、君の経歴には全く傷はついていないわけだ。よしとしようじゃないか」
- 田中** : 「いやいや、それもそうですけど私の出した有休届は.....」(笑)
- GM** : 「こればっかはねえ.....。ごめん、これから君には長期任務についてもらわなきゃならないんだ」(笑)
- クリス** : さすがサラリーマン、いかに危険にさらされてもこの有様。
- GM** : 「まあ、なんだ、この長期任務も君にとっちゃすぐに片がつくことだよ。なあに、それが終わったら君の望む長期休暇もきっと取れるようになるさ。まずはそのために我が社に貢献してくれないとね、そうは思わないかい？ 私だって辛いんだよ。君みたいな優秀な人材を戦地に送り出すのは心が痛むんだけどねー」
- シオン** : そこで秘書がこんこん、『明日のゴルフの件なんですー』(笑)
- GM** : そんなことはない！「バカンスだと思ってさ。.....言いたい気持ちはわかる。次の任務先だよね？ それはこれからすぐに私の秘書が持ってくるからそれに目を通してくれたまえ」
- シオン** : こんこん。「部長、書類です」
- 田中** : 部長に渡される前にばさって取るよ。一応見るんだけど、どこに向かうかは.....。
- GM** : 君は半ば予想していたのかもしれない。『ホワイトスネイクの例の荷物の運搬の護衛をよろしく。当然我が社が絡んでいることは秘密でね』
- 田中** : じゃ、「部長.....。またガキ相手っすか!？」と大声を上げて締めましょうか。(笑)

SCENE 4 シーンプレイヤー：レキ・ストランド

- GM** : 君は無線か何かでハンス・ウィルマー——プリムローズのリーダーですね——と交信しています。
- レキ** : 「無事に物は受け取ったんですが……」
- GM** : 「そうか。……だが？ まだ何かあるのか？」
- レキ** : 「制作者のマーカスが亡くなりました。同時期に帝国から襲撃があったのですが、どこからか情報は漏れていませんでしたか」
- GM** : 「それはこちらの方でも調べてみるよ。引き続き運搬業務をよろしく頼む」
- レキ** : 「わかりました。それと、こちらから連れてきたパンツァーリッターのアーダルベルトは死亡しました」
- GM** : 「何！？ じゃ、あれは動かせないのか」
- レキ** : 「いえ、マーカスの息子シオンが3機のゲパルド・ギア、うち1機はあの“灼熱の”アインの機体を撃破するという事態を見せました」
- GM** : 「マーカス氏のご子息が。そうか……」
- レキ** : 「彼もマーカスさんの遺志を継いでこちらに機体と共に参加してくれるということで、今、船と一緒に乗っています」
- GM** : 「そうか、何にせよ任務ご苦労だった」とねぎらいの言葉をかけます。
- レキ** : 「いえ、多分これから襲撃があると予想されるので、できれば……」
- GM** : 「わかった。こちらもできる限りの補給と協力は惜しまん。頑張ってこちらまで持ってきてくれないか」
- レキ** : 「わかりました、全力を尽くします」
- GM** : 「よろしく頼む。君は信頼している。無事に帰ってきてくれ」という形で、向こうからの交信は切れます。
- レキ** : では指輪でも見てみましょう。……あ、もう返したのか。
- GM** : 指輪は手元にないにせよ、ちょっと思うところがあるらしいです。
- レキ** : 「あの指輪は……ウェストリ王国の王女が持っているはずの指輪……」
- クリス** : あれ？

SCENE 5 シーンプレイヤー：フリーデ

シオン : 最強お手伝い！

フリーデ : お手伝い系のことはしていたのかなあ？

GM : あなたは彼のお供という形でホワイトスネイクに乗っています。

フリーデ : はい、ごく当然のように乗りこみます。

シオン : 「――あれ、ついてくるのかい？」

フリーデ : 「質問の意味を計りかねますが、何かご不満でもおありでしょうか」

シオン : 「これから先.....戦いになるよ？」

フリーデ : 「わたしを直し、わたしに命を与えてくださったのはマーカス様であると同時にあなたです。お忘れですか？」

シオン : 「.....いいの？」

フリーデ : 「この先あなたが戦いの中で死ぬことがあったとしても、それはわたしより早いということはありません。わたしがいる限り、あなたは必ず御守りいたします」

シオン : 「ありがとう」

フリーデ : 「これからもよろしく願います。.....マスター」

シオン : マスターになってしまった。

クリス : ええ話や。

シオン : それには照れたような笑いを浮かべて「お願いするね」って。

GM : そういうシーンがあった後、ちょこっと一人きりになります。あなたはヴァルキリーなので昔を懐かしんだりしないんですが、あまりにも激しいことが起こりすぎたので、ふと平和だった頃のマーカスの何げない一言を思い出します。それは当然研究所で設計とかをしていたマーカスが、珍しく似つかわしくないセリフを言った時でした。

フリーデ : ほう。

GM : 「なあフリーデ、こんなことはまずないと思うのだが、もし私に何かあったらあいつのことをよろしく頼むな」

フリーデ : その時はなんでそんな当然のことを言うんだろう、って感じで「わかっております、マスター」って答えていたでしょうね。

GM : 「こんなことを言うのはらしくないが、な」という言葉を思い出します。

フリーデ : じゃ、「マーカス様.....。あなたはこうなることをどこかで予測しておられたのですか.....？」って呟きます。

GM : そして夕陽が沈むところに向かって船は向かっていくのでした.....。

【おまけ】

田中 : あ、そこに来る船団がいると思ってください。回収したいネタがひとつだけあって。

GM : わかりました、許可します。

田中 : すごくくだらないんだけど、やろうやろうと思ってできなかったんだ。最後、「おう、坊主！ この荷物を売りに来たんだ！」っていう形で。「このコソっとしたものを運んでくれないかー？」（笑）

シオン : 「そのコソっとしたものは彼が頼んだあのコソっとしたものなんだね？」

フリーデ : それがオチかー！

シオン : 「わかったよ、今サムがいないから僕が預かっておくよ、そのコソっとしたもの！」（笑）

GM : そのコソっとしたものが何だったのか、それはシオンしかわからない.....。

おわり。